

【クレーム情報】

ドライクリーニングによるフェルト収縮

冬物衣料の定番素材であるウールや獣毛の取扱いについては、十分に周知されているはずであるが、いまだにフェルト収縮の事故が発生している。また、ドライクリーニングでフェルト収縮が発生するはずがない、と考える人もいるようである。今回は、ドライクリーニングによるフェルト収縮の事故を紹介する。

事故の状態

太くて撚りの少ない糸を使った織地のジャケット全体に、毛羽立ちと収縮が生じている。生地本来のふくらみや柔らかさがなくなり、硬く締まったような状態で、明らかにフェルト化していることが分かる。

原因

ドライ溶剤中の水分が多すぎたり、ジャケット自体が水分を含んでいたりとすると、うるこ状の毛表面のスケールが開く。ここにワッシャーによるもみ作用が加わることでスケール同士の絡み合いが生じたため、収縮となったもの。こうした現象をフェルト化という。

事故の防止対策

ドライ溶剤中の水分および製品自体に含まれる水分を除去するとスケールが開かず、もみ作用を加えてもスケール同士の絡み合いは少なくなるのでフェルト化を防止できる。

以下は、工程別の防止対策。

● 予備乾燥

製品自体がすでに汗などの水分を含みスケールが開いている可能性がある場合には、予備乾燥で水分を除去する。タンブラー乾燥機を使う場合には、タンブラーでの回転がフェルト化の原因になることがあるため注意が必要。

● 洗浄

ドライ溶剤中の過剰な水分と製品自体が持っている水分が除去されれば、ドライ溶剤の種類に関係なく洗浄によるフェルト化は生じにくい。ただし、太くて撚りの少ない糸を使ったザツカリとした生地やアンゴラなど柔らかな風合いの素材は、特にフェルト化しやすいため、ネットを使って短時間で処理するなどの配慮が必要。

● 乾燥

水分さえ除去されていれば通常の

タンブラー乾燥が可能。ただし、タンブラー温度が高すぎたり、処理時間が長すぎたりしないように注意する。

● ウェットクリーニング

ウールや獣毛は、水に濡れてスケールが開いた状態であっても、もみ作用を加えないように処理すればフェルト化することはない。

ただし、生地張力の緩和による収縮や風合いの変化などウェットクリーニングに特有な変化については、顧客に了解を得ることが必要。

事故防止システムで検索

日本繊維製品・クリーニング協議会が運営する「クリーニング事故防止システム」でウールの収縮事故を検索すると34件の事故情報が確認できる（12月18日現在）。このうち、明らかにフェルト化と判断できるものは、12件。ウールや獣毛製品のフェルト収縮については、クリーニングの側の問題として処理されることになるので十分に注意されたい。

事故防止システムの利用には、日本繊維製品・クリーニング協議会への入会が必要です。詳細は、日本繊維製品・クリーニング協議会事務局にお問い合わせください。

TEL. 03(5362)7201



▼表地がフェルト収縮しているため、裏地が余ってだぶついたようになっている



▲表地全体に毛羽立ちと収縮が生じている。生地本来のふくらみや柔らかさがなくなり、硬く締まったような状態

- 品名…婦人ジャケット
- 素材…毛85%、アンゴラ9%、絹6%
- 取扱い絵表示



- 処理方法…石油系溶剤によるドライクリーニング、洗浄時間7分、タンブラー乾燥30分、乾燥温度は不明、ハンドアイロンによる仕上げ。